

お茶の歴史

なったのは明治時代のこと。明治二十年頃、霜よけのために茶樹に「わらかけ」をしたところ、大変良質なお茶が出来上がったため、明治末期には五〜六戸の農家が玉露茶として被覆栽培を行うようになりました。

昭和三十年に岡部町が合併誕生するまで、朝比奈玉露はほとんどが宇治へ流通されていました。町村合併後、農協でも扱うようになり、『岡部銘茶朝比奈玉露』として販売されました。

その後、朝比奈は宇治（京都府）、八女（福岡県）と並ぶ日本三大玉露産地として発展。特に茶園管理と製造技術の高さで知られるようになり、全国茶品評会「玉露」の部では、昭和四十年以来、十回にわたって農林水産大臣賞を獲得。平成三年にはお茶のテーマパーク『玉露の里』がオープンし、岡部町の朝比奈玉露の名声をさらに広めています。

●解毒、薬効に長けた茶

茶はツバキ科の常緑樹でアジア南部の亜熱帯地方が原産。原産地は中国雲南省ともヒマラヤ山系ともインドのアッサム地方ともいわれていますが、未だに確定されていません。茶が文献に初めて登場するのは、中国漢方薬の祖といわれる神農という人物が、約四千年前に記した『食経』『支那本草学』。その中で彼が茶葉を解毒に用いていたという記述があります。茶を飲み物にしたのは、漢時代以降のことで、『三国志』には呉の孫皓が酒が飲めない韋曜のために茶をふるまった様子が描かれています。

お茶が飲料として本格的に文献に登場し

たのは、唐代の七八〇年頃。学者陸羽が『茶経』を著し、茶のおこり、茶の適地、製法、飲み方、薬効などを詳細に記述しました。それによると、当時は茶葉を蒸し、固めて干したものを火にあぶってから臼でひき、粉末にして湯の中に入れて飲んだようです。陸羽は「茶は喉のかわきをいやし、精神力・思考力を高め、疲労回復に効果がある」と述べています。この『茶経』はまづ僧侶の間で評判になりました。お茶が禅宗の修行で眠気や疲労防止に大いに役立ったからです。その後文人や一般庶民の間にも広まり、八〇八年には唐王朝が茶税の命令を出すほど、茶業が盛んになったようです。

れています。日本の文献では『奥儀抄』に、天平元年（七二九）、聖武天皇が僧侶の読経後に茶を与えたことが記され、遣唐使が中国の喫茶の風習を伝えたことがうかがえます。また『日本後紀』には、弘仁六年（八一五）、近江国の大僧都永忠が嵯峨天皇に茶を献じたという記述があります。献上するほどのものですから当時のお茶は貴重品で、一般には普及していなかったと思われれます。その後しばらく文献には登場しませんが、建久二年（一一九二）、宋で禅を学んだ栄西が茶の種子を持ち帰り、脊振山靈仙寺（佐賀県神埼郡）にまいて茶樹を育て、『喫茶養生記』を著し、茶の栽培法や製造方法を世に伝えました。

●日本の茶祖栄西禅師と、

茶を広めた明恵上人

日本にお茶が伝わったのも唐代だといわ

栄西がもたらしたお茶を日本に普及させたのは京都桓尾の高山寺の開祖、明恵上人です。彼は栄西からもらった茶種を基に桓尾で茶栽培を始め、日本茶の本流である桓